

夢洲 動植物の夢の島

写真は毎日新聞 6 月 11 日夕刊 1 面トップ。5 月 11 日に「初上陸」した夢洲が動植物のホットスポットであることに迫る。私のコメントもあり、記事を紹介したい。

2025 年大阪・関西万博の会場となる大阪湾の人工島・夢洲（大阪市此花区）で、公益社団法人「大阪自然環境保全協会」（同市北区）が今月中旬から、動植物の生育・生息状況を調査する。同協会は既に、環境省のレッドリストで絶滅危惧種に指定されているコアジサシの飛来を確認した。調査を基に、万博会場の建設が生態系に影響しないよう提言をまとめる方針だ。



夢洲は 1977 年に廃棄物処分地として整備が始まり、今も埋め立てが続く。万博に向けた建設はまだ始まらず、面積約 390 ㍍の広大な土地はコンテナターミナルや太陽光発電施設などがあるだけだ。草地や池が広がり、野鳥が集まる環境ができている。

対岸の咲洲の「野鳥園臨港緑地」も含めたエリアは、大阪府から希少な野生生物が生息する「大阪の生物多様性ホットスポット」に選定されている。大阪市によると、過去に夢洲がコアジサシやシロチドリなどの繁殖地だったとの報告もあるが、近年の状況は不明な部分が多い。同協会は 5 月中旬、会場予定地の夢洲南側などで事前視察をした。約 1 時間でコアジサシ 10 羽以上やシギ・チドリ類など数種類の野鳥を確認した。

夢洲がコアジサシの繁殖地になっている可能性があり、同協会はより詳しい調査が必要と判断。専門家に協力を依頼した。同協会などは調査後、7 月にかけて市民ら対象のワークショップを開き、環境保全の課題を議論する予定。市民による環境アセスメントとして提言をまとめ、どのような調査を実施すべきか万博の主催者などに呼びかける。



同協会の加賀まゆみ理事は「夢洲の開発で大阪湾全体の開発が大きく変わる可能性がある。動植物の生態系をしっかりと調査し、影響をできるだけ減らすよう市民の立場から求めたい」と話す。万博の実施主体となる日本国際博覧会協会の担当者は「工事着手前に行う環境影響評価（アセスメント）の手続きの中で調査を行い、結果を踏まえて対応する」としている。

05 年の愛知万博では、会場候補地の里山「海上の森」で希少な猛きん類のオオタカの営巣が確認され、市民らが大規模な保護運動を起こして会場が変更になった。愛知万博に詳しい山田明・名古屋市立大名誉教授（地方財政学）は「市民が専門家の協力を得ながら調査し、意見を言うことは大切だ。大阪・関西万博の主催者は、夢洲の環境調査の結果を注視し、市民の声を真摯に受け止める必要がある」と話している。

(2019 年 6 月 13 日)